

## 中央大学第 30 回学術シンポジウム

### 第二回：学術シンポジウム 研究会

日時: 2024 年 3 月 13 日 15 時から (14 時 30 開場)

場所: 中央大学市ヶ谷田町キャンパス十一階 101

### 開催趣旨

#### AI 技術との共生に関する思想の検討

##### はじめに

共生思想の先端的な研究を目指す本研究プロジェクトに於いて、現在深刻な懸念材料となっている、最先端技術と人類の共生を問いかける視点、特に AI 技術の発展において、人間の知的働きを凌駕する創造的能力を持つとされる生成 AI の出現は大きな研究テーマである。この生成 AI は、人類の未来に飛躍的な利益をもたらすことが予測されるその一方で、人類独自の知的領域である創造性を凌駕する生成 AI 技術によって生み出される予想だにしない結果への不安感が共有されつつある。

そこで第二回研究会では、人類文明の最先端の道具である AI の有効性と危険性（危惧される問題点）の双方の視点から、道具としての AI と人類の共生について検討する。

#### 道具としての AI という視点

そもそも道具を使う賢い猿人（ホモサピエンス）である我々は、脆弱な肢体あるいはその能力を補い、更にそれを拡大、増強させる手段として道具を考案した。その意味で、道具とは人間の能力の拡大化の願望の具現化であると言える。故に、人類は生み出した道具に技術的改良を加え、更にそれを発展させるという循環の下、現在に至っている。その意味で、現在の我々の生活は、各種の道具の創出（発明）とその改良（技術革新）の歴史の上に成り立ってきたといい得る。その道具やその技術の向上とは、我々の知恵の具現化であり、その領域を現在の学問的な範疇に落とし込むと、所謂人文科学、社会科学から自然科学領域の全てに見いだすことが可能であり、同時にそこには、人類の「厚生（より良い生活、生き方）」を希求したという意味での大原則があったと理解できる。勿論、そこに明確な目的意識として共有されていたかは別である。

さて、人類的活動の成果としての各種の道具の発明、更には、その技術革新は、長い年

月を通じて結果的に、人類の進歩、つまり人類にとってより良い生活空間を創出したという意味で道具の発明や技術革新は、人類が希求した「厚生」の為の知的行為の現れであったということは言い得よう。

それ故に、道具の出現、更に技術領域の問題を扱うには、人文・社会・自然科学という個別領域の特殊性に焦点をあてた分析的研究が不可欠であるが、同時にそれは人類がより良く生きるための手段、つまり「厚生」の為の知的活動であるという意味で、総合的な視点からの検討も不可欠である。

しかし、現在の道具に主軸があり、総合的な視点からの検討が不可欠となる。特に近代科学と呼ばれる自然科学領域の技術革新は、いわばこの総合的な視点、更には「厚生」という総合的な視点が弱く、寧ろ技術の可能性の追求を重視する傾向にあった。それは技術領域の暴走とも云える現象である。勿論、その結果人類に大きな豊かさをもたらしたことも事実であるが、その豊かさの故に人類は、地球環境の破壊など、自らの存続の危機的情況さえ生み出しつつあることも事実である。

そして、この科学技術の暴走の最後の一撃となるかもしれないと恐れられている道具が、AIであり、その最先端である生成 AI である。

## 近代科学思想の陥穽とその補完

前述のような西洋近代文明、更には西洋近代キリスト教文明（一般には、これを近代と表記し、地域色、つまりキリスト教的な文明要素の存在を希釈している。その典型が、西暦という表現である。これは本来キリスト暦とした方が分かりやすい）下において生み出された自然科学の驚異的な発展、というよりも暴走とも云える現象は、多くの豊かさを人類にもたらしたが、その一方で深刻な危機を生み出してきた。その背景には、前述の様な近代西洋文明特有の根本思想がある。その象徴が唯物論的で、機械論的な世界観に支えられた分析主義、個別主義の思想である。つまり、あらゆる領域は、その（唯一の神によって創造された）独立性という前提があり、その個別性を明らかにすることが、つまり自然科学の大きな目的でもあった。なぜなら、自然科学の目的の一つに、人間を含む被造物としての自然に内包される神の意志を明らかにすることがあったからである。それ故に、対象を個別化し、更に峻別し、分析しその特長を明確化すること、そしてその作業こそが理性という神が人間に与えた特性である、という考え方を基本とする。その為に、自然科学は、人間を含めたあらゆる対象を、猛烈な勢いで細分化し、唯物的な世界観によりこれを数字に置き替えることで、抽象化と普遍化を可能とした。これが近代科学を支えた合理主義思想の主流である。

しかし、この考え方では捉え切れないものがある。その典型は例えば人間の内面であるし、数字に置き換える時に、こぼれ落ちる特殊性に関しては考慮しないか、据え置きされているからである。その思考の不備は、科学技術という道具の革新においても現われている。特に、個別的な合理性を基本とすると、結果として狭い範囲の目的合理主義的な技術

の追求となり、その技術により生み出される道具やその運用としての技術に関する全体調和への配慮は、二の次あるいは、神の領域として棚上げされることとなりがちとなる。その結果が、所謂合成の誤謬とも云える個別最適、全体最悪的な結果を生み出す事となった。現在我々が直面する環境破壊などはその一例である。その意味で、近代西洋科学技術最先端である AI、更には生成 AI への危惧も故無しとしない訳である。

とはいえ、現在社会が、高度に発展した各種技術を抜きに維持できるわけではないことも事実である。要は、西洋近代以降の科学文明を支える思想に、他者との連関、いわば共生という視点を付加することで、そのマイナス要因を形成する部分は解消される可能性が大きい。つまり、科学技術はあくまで技術であり、その用いかた次第で導き出される成果も大きく異なるという意味で中立的な道具なのである。故に、技術の有効性や危険性を一方向から議論するのではなく、寧ろ科学技術を人間のみならず、他者との共生と言う視点からその有効性や用い方を検討するという、近代以降西洋近代科学が依拠してきた思想を、他者との共生を目指す思想を基礎とする方向に転換することが、今現在求められる課題である、と位置づけることが必要であろう。

つまり、近代科学文明が得依拠してきた一元的な思想、文明構造から、各要素の相互依存性を基礎とする南ユーラシア（南・東南・東アジア）に於いて高度に発展した仏教に代表される相互依存の共生（縁起）思想のような多元的発想にパラダイムシフトすることで、それは可能となるのでは無いか？そして、この他者との関係性を重視するアジア的、特に仏教的思想更には、その文明の上に、近代西洋キリスト教文明的近代科学の両者を上手く取り入れてきた日本の思想からは、この技術の暴走を抑止できるバランスの取れた思想形成に、大きな役割を期待できるのである。

## 日本から AI との共生の知恵を探る

さて、既に概観したように、各種技術は基本的に、人類の生活の厚生を目指して生み出されたものであり、道具は基本的に人間の能力の強化を基本として進歩してきた。その時、特に象徴的なものは物質領域に関する点が認識し易い故に、注目の対象の中心となる。例えば、道具を用いて、空間的、時間的縮小や拡大、あるいは重力領域、特に重いものを制禦する場合などである。しかし、それに付随して、技術の進歩に伴い、個々人からその集合体であり社会においてもその生き方は変化する。つまり、社会変化に伴い生きる意義、それは価値領域にも必然的な変化が伴うということであり、その逆も又真である。とすれば、生成 AI のような脳機能を強化、拡大した領域に最新技術が踏み込む事は、必然と言うことになる。とはいえ、この変化は従来以上に不明な点があり、この新技術により生み出されるであろう結果が、予測できぬという不安に答えるためにも、AI との共生と言う視点から大いなる議論が必要となる。

その一方で、その不安を解消するのもやはり AI という道具を最適化し、用いる技術という知恵が不可欠である。そしてその知恵は、領域横断的な諸学間の交流が不可欠となる。

その時にこそ相互のコミュニケーションを可能にするインターネット（インターネットの父的存在である慶応大学の村井純博士は、これを「網間接続」と翻訳された）に、大きな役割が期待できる。

「学術シンポジウム第二回」においては、以上の様な視点を中心に、慶応大学の佐野仁美先生、比較思想学会会員松田康男氏にご発表頂き、議論を深める。

---

## 「情報文明の AI」

佐野仁美先生（慶應大学、比較文明学会会員）

西洋科学文明は、それまで雄大な自然環境と一体であった人間が、神の領域でもあった万物の因果関係の支配者となりうる実感に包み込まれた時代であったのではないか。自然法則を理解し応用できる自然環境の支配者として地球の資源を使い込み、自然環境を破壊する公害も引き起こし、兵器も開発した。人間が人間であることに対して、ある種の万能感に満ちていたのが、西洋科学文明の中の人間であっただろう。

しかし、2024 年現在、人間は「AI 脅威論」を唱えるなど、AI に怯えている様だ。なぜ人間は AI を脅威として見なすのか。デジタルテクノロジーはこの 30 年以上急速な進化を続け生活を便利にするツールとして社会に浸透し続けた、しかし生成 AI の広まり以降は顕著に、AI の利便性と脅威性の二面性に着目し、人間は AI との共生の道を模索している。

これは、西洋科学文明の根底にある核となる性質が揺らいでいるからだろう。AI の登場によって、物事の因果関係の支配者の階層構造において、AI が人間の上に立つ可能性に人間は動揺する。地球の自然環境の支配者および自然因果の解明者として、万能感に包まれていた人間の立ち位置が不明瞭になり始め、AI の進化をきっかけに文明としてのアイデンティティを喪失しかけている。しかし、AI だけに着目しては、人間と AI の関係性を明確に客観視できない。この数十年の間に、デジタル自然環境は地球規模での変革を遂げており、新しい情報文明の中での AI と人間の立ち位置を見直すことが重要である。

---

## 「許されざる人工知能 (AI) ・許される AI」

松田康男先生（比較思想学会会員）

昨今 AI 論、文明論はそれぞれ盛んであるが、AI が近未来の人類の方向を決める要因になり得る広範な科学技術である以上、AI 論と文明論を有機的に結合した新しい総合的理論が必要である。また、その文明論も従来のような「人間」のみを視野に入れたものでは不十分であり、現在 AI と密接に関連しながら加速度的に進展しつつあるバイオテック・ナノテック

等も視野に入れ、脳と AI の結合・サイボーグ等まで視野に入れた文明論でなければならない。そのような新しい文明論として、世界的な環境破壊によって失われた自然との共生の回復に不可欠な「人間生物学的基礎」（「人間」が生物として持っている基本特性。言語能力等）の中核的要素として「人間に於ける無意識の重要性」を特に唱えたい。意識と無意識は「人間生物学的基礎」を土台に複雑で貴重な関係を持っており、これを破壊・阻害する AI は許されない。そして、「無意識の働きが自然と密接な構造になっている日本人」こそ、このような主張と実践の世界に於ける始動役として相応しいことを、発表者のドイツ人達との長年の交流の経験による異文化体験を踏まえて示したい。